

## 二つの祖国の花

福岡市西区 岡田 幸子

桜の花は日本の象徴ともいうべき、それは美しい花ですね。その美わしき花咲く祖国日本へ一日も早く帰り着きたいと、旧満州国新京で姉と私は毎日どんなに祈り続けたことでしょうか。姉が11才、私が8才の時です。第2次世界大戦が終結して1年も過ぎていたのです。終戦が近づく昭和19年頃から日本人の満州（現在、中国東北地方）からの脱出が始まっていました。1年もの間の今日こそは帰れるという願いが叶って、日本へ帰国出来る船に乗れたのは最後の最後の引揚げ船だったのです。昭和21年秋の頃でしょうか。博多港に無事に着き、大濠公園の引揚者集合舎で配給物を頂いて、先祖の地へ向かう汽車の窓からは真っ赤な彼岸花が咲き乱れていましたから。

私は奉天で生れ、戦争が激しくなると7才の頃までは、父母と姉の4人家族で幸せでした。父は公務員（警察官）を辞めて、会社員（NHK奉天支局）になり、乗馬やマラソンが得意なスポーツマンでした。母は福岡女学院卒業生で、当時の婦人方がそうであったように、和裁、洋裁、編物、手芸、お料理、デザート等、すべて母のお手製でした。父も母も外国語が堪能でしたので、白系ロシアの人や中国の人々とも楽しく交際していました。台所での母は、美しい声で色々な歌を唄っていた。奉天の町を馬車に乗ってよく回った。赤いランタンが入口で風に揺れるお店で、アイスクリームをおやつにしたり、金色に輝く把っ手のガラスの回転ドアを押して、日本からのお客様を訪ねた大和ホテル。父の会社の運動会には母は必ず丸髻(まげ)を結って、お重箱一杯の御馳走を詰め、皆で父の応援をした。春には、日本の桜の花に似たピンクのリラの花が咲き、夏になれば皆で浴衣を着て、夕方から劇場や映画館に行った。

しかし戦争は日に日に激しくなり、空襲から逃げるため防空壕に避難することが多くなり、B29は恐怖の爆音と共に雨のように焼夷弾を市街地に落とし、ビルや住宅は焼け崩れ、犠牲者も多く、家の中は爆風で窓やドアが壊れ、爆弾の熱い鉄片が飛んで来た。米兵が落下傘で舞い降り捕虜になった。

そんな時、父に二度目の召集令状が来た。一度目は、日華事変（昭和12年出兵）で無事帰還していた。父方の祖父もお国のために二度の召集で出兵し無事帰還した人だが、日露戦争では明治天皇より何個か勲章を授かっていた。父に来た赤紙、今でも忘れることはない。それも終戦の年の4月であった。軍務地は新京の関東軍本部であった。私達家族も、少しでも父の側で生活したいという希望で新京に引越をした。新京の家の窓からは、父も必ず聞くであろう軍隊ラッパの音色が朝な夕なに聞こえていた。あと、2週間で敗戦だという8月、ソ連軍が侵攻して来るといふ街中の噂で大混乱となり、私達3人とも皆と一緒に南へ南へと逃げる途中、奉天の駅で日本が戦争に負けてしまった事を知った。安東という田舎まで逃げ落ちた。

しかしソ連軍は田舎街まですぐに侵攻して来た。女性は髪を切り、男装して身を守った。私

達の家にもソ連兵が数人土足で来た。怖かった。死ぬんだと思った。母は大切な父の金時計を差し出し、ロシア語で一生懸命話をし、何事もなく済んだ。私達は新京行の汽車が出るのを何日も待って、父がいるであろう家に戻ることにした。北へ北へ、途中、馬賊や強盗団の恐怖と被害に脅えながら、新京の家に辿り着いた。父は元気に軍隊から授かった家に帰って南へ逃げた私達を待ち続けていたのに、「男性は集合して下さい」という呼びかけでシベリアに強制抑留されて、私達とはすれ違いでした。

戦後初めてのお正月を迎えても、父の帰りを毎日待ち続けた。ドアの外で父の足音が聞こえる気がして、走り開けたこともあった。昭和21年3月、父の帰りを待ちながら、姉と私の娘2人の命を守り抜きつつも母は病に倒れ、病院に入院して、僅か1週間で帰らぬ人になりました。3月とはいえ厳冬の新京。大きい病院の奥の病室のベットでの最後の母に、姉と私は泣きじゃくりながら、母の黒髪にハサミをいれてお別れをしたのです。残念なことに当時火葬ができず、土葬でした。埋葬の日、遠くて寒くて子供には無理だということで、私達姉妹は連れて行ってもらえませんでした。

戦後50年、今でも母は一人新京です。幾年、日本の四季を巡り巡って、春には必ずその桜を見つめ、生きてきた日々の中で、また法要を営むたびに、私は母を迎えに行かなくては、母を連れて帰らなくては、と今も思いつづけています。当時、新京で日本人を土葬にした墓地を御存知有りませんか。教えて下さい。せめて場所だけでも知りたいのです。できることなら、母の遺骨を、もう安らかな眠りにしてあげたいのです。

その後、父はシベリアから引揚げて来ました。幾多の試練を越えて父と娘の生活が始まり、姉妹で大切に守っていた母の遺髪を、父は先祖の墓に埋葬しました。母は遺髪だけですが、父の手により永眠する事ができたのです。今は父も亡くなり、賢く美しかった姉も7回忌を終えました。神戸に住んでいた姉は、神戸の病院で1年間白血病との壮絶な戦いでした。博多と神戸を何回となく往復しました。父母の臨終にも逢えなかった親不幸の私にとって、たった一つの慰めは姉の最後を一緒に過ごした事です。

平成6年11月、神戸の病院より物故者慰霊祭の案内を頂き、参列し、式が終わって姉を偲びながら、神戸の街を堪能して帰りましたが、それが阪神大震災直前の最後の神戸でした。今では主人も亡くなり、嫁いだ娘が一人います。家族みんな、仏様になられて、娘と二人何度となくお寺とお墓をお参りしていることでしょう。

去年の暮れ、世界的指揮者小沢氏が生れた奉天をお母様と行かれ、感動されてるテレビを見ました。私も自分が生まれた奉天を何十年ぶりに見て、懐かしく涙が出て来ました。そして、私も再び、新京と奉天の大地をこの足で踏むことができ、永い間一人ぼっちに淋しくさせて母をこの胸に抱いて、日本に帰ることが実現するのでしょうか。私の戦後はまだ終わっていません。



父と母と姉と筆者（母の膝の上）  
父が日華事変から無事帰還した記念に撮影